凧人白書

凧合戦も数日後に迫つた。町は凧合戦の雰囲気でムン／＼してゐる。さて、そこで青年以外で昔から凧を主になつて指揮される人を紹介してみやうと思ふ（主になつて云々は、まこと体裁はいいが——凧マニヤ——失礼——のこと）その凛々しい姿は遠からず土堤でタンと拝観出來る。青年の意気と力は凧揚げにはなくてならぬもの。しかし経験と卓越した技術もなくてならぬものだ。

凧揚げには年はない。ハゲ頭も、白毛も、みんな二十才前後のポマード臭い頭に還る。ただリーゼントでないだけ。ポマードの匂ひがしないだけ。

行脚の第一は協會長清水氏。協會長に推された經緯を詳しく語り『勿論●大好きなのだが、健全娯樂として、又浦原平野の傳統的祭として、共に誇るべきだと考へます。空と陸のスポーツとして他に類をみないのだから今後も皆様から精々援助して頂き、益々発展させたい』と一調子高い地声。『凧揚げする人は藝人ですよ。藝を磨くことが藝人の生命なら、凧人は凧を揚げることだけが生命なんです。先輩の傳統を享け継ぎ、新進の創意工夫を加へる。これが凧の発展の原動力ではないでせうか凧は白根町の在る限り永続出來ると信じてゐます』——さすがである。

◎下から上へ……。兎に角能登のさらしやさんへ寄る。凧の話になると一膝乗り出す。岳父も矢張り凧好き。あの親にしてこの子か。凧マニヤ二世のわけだ。十八の頃から二十余年綱にしがみつく。花火がなると仕度もそこ／＼、土手へ走つて行く。とは夫人の辯。『綷風滿腹、大空に乱舞し、將に挑戰せんとする巨凧云々（漢文調美文的佳句）——か丶る時のスリルが何と云つてもたまりません』白根ツ兒の意気なんでせう——平凡な白根の生活の中に、凧の負けん気な、豪壯な精神を汲み入れたい。まあこれが私の信念ですね』この人、生粋の威勢のよい白根ツ子的感じ、土手ではシワだらけの登山帽がよく似合ふ。

◎隣の魚町は、本間大工さんの敷居をまたぐ。『目の色を變へて土手へ飛んでゆくのだから町中知らぬ人はないでせう。』これはオバーサンの言。『若い頃は凧がなかつたら、白根から飛び出す元気でしたがね——本當に凧がたつた一つの樂しみだつた』としみ／＼。推して今日の姿知るべし。『今の若い人は品を作り、紳士的に——尤も時代でせうね。』と感慨無量。『やつぱりあのか丶るかからないの際が、一番胸がぞく／＼しますよ。——信念も、希望もないですね。（謙譲の美徳か？余り話上手ではないらしい）只もう凧にきへつかまつてゐれば、それで樂しいのです。』と煙草をくゆらしながら。

◎五六ノ丁は高橋桶屋さん。五十の坂を越ゆること五年。まこと白根ツ子ならではと感ずる。もう年を取りまして走るのが辛い。若い頃のやうに力がなくなつてしまつて——。しかしやつぱり花火がドンと鳴りますと、私が凧の骨を削つてゐるものですから、気になつて土手へ走つてしまいます。』至極恐縮しながら語られるので少々辟易す。『若い頃は、今よりも風がよく吹いたやうですね。何しろ夜なべしたり、白凧を揚げたりしたものだが、最近は仲々風が吹かぬやうで……。』もう三十余年凧揚げをしてゐる勘定。

◎さて横町は。と思ひ、武田大工さんへ上ろ。四十六才だそうだが年の割に老けてみえるのはゴマ塩の爲か。小柄の体作り、柔和な顔。『か丶る時の気分もよいが、立上りの快味も又格別——。凧を自分のものなんだ。』と云ふ大きな度胸で。（と仰言るが、さにあらず。高等技術を要す）花緒だつてかんですよ。數學的に……』こゝで技術論展開。紙面の都合により省略。『凧によつて協同精神を養ふ』一致した気持。バラバラの気持でどうしてあの凧が揚りませう。多くの人が気を一つにして始めて凧が揚るのです。』昨年のニュース映画に收められ、もうこの頃全國紹介済のわけ。

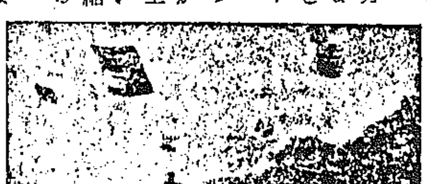
◎大体凧マニヤは、所謂職人が多い。職人のキップが凧揚げの意気と一脈相通ずるらしい。これも元染物屋をしてゐたと云ふ櫻町の田村さんへ伺ふ。今は水利組合勤務の由。『ここは私でなくつて、四ノ丁の織田さんの方へ——あの方に技術的の指導を仰いでゐるのだから……』と言はれるのを、强つてお願ひする。『幸い、町内の方々のお骨折りで新絲も出來ましたし、今年こそは、と皆で張り切つてゐるのですが……。』年は五十六でも『この傳統的な凧合戦をいつまでも保存したい。あの威勢の良い青年の意氣。兎に角凧合戦よ盛んなれと祈つてゐます。』腰少々曲ると言ふも、土手へ行けばシヤント立つ。

◎一ノ丁は田村諸屋さんへ訪れてゆく。『好きのものだから、へい若いモンの先に立つて——カブつた時の、凧の花緒がパラつと散るやうな……。』となか／＼凧を藝術的に語られる。『実際の話。花見や酒よりも凧の方が面白い。』——花より凧——といふところ。『近頃の若い人は、どうして凧をかついだとき雌をかけないのでせう。あれでずつと凧合戦の雰囲気が異ふのだが……。』夫人はバリ／＼した口調で語られた。尤も千万白根ツ子よ意気を示せ。北風に向つて——。當年四十二才。十二の頃より凧の友達となる。在学中、節句ともなりぬれば風のみ気にして、勉强身に入らず。それで優秀の成績にて卒業す。

◎『十年來、懸案の凧も漸く揚るやうになりました。新絲も出來ました』……と新絲を指し乍ら嬉しそう。諏訪ノ木の山川さん。青年の努力が実を結んだと諏訪ノ木青年を激賞。『昨年はまだ一年生だつたのですが今年は新絲に、新しい骨ですから、思ひ切つて掛けます。——東軍の方に川の方へ出してもらつた時、頭を傾けないやうにしてもらへたら……』と考へてゐます。』若い頃の腐凧を夫人が見せられた。ハッピ、坊主頭、丶しき若人。二十数年前のもなり。『一本の綱につかまり心も眞直に一本。皆が力を合て凧を揚げる——これを日常活の中に取り入れたいと思いす。節句になると朝飯もそこそこ、凧作りをする青年を指揮される由。

◎行脚を終へて、はつと一服。白根の結末を大至急つけやう。共通点は、——飯よりも凧——尤もこれ位の健気な心意気なくては凧人などと稱へることあるまじく。第二は、凧のか丶るときのスリルが堪らない——と言ふこと。これは白根モン衆がそうかもしれぬ。『長口上はボロのもと。』まずはこゝらで。

◎註 先輩諸兄に、隨分失禮な辯を吐きましたが、何卒お許し下さい。



夏は來ぬ

五十嵐　周治

うすごろもまとえる君の姿より紋の風の沏く思いする（主婦の友より）

花は咲き花は散る。咲く花も美しければ散りゆく花も又美しい。

諏訪の木公園の櫻を愛でたのもすでに昨日のこと、逝く春の愁いは深く濃い。

春を惜しむ間もなく早くも、すがきの風かをるこの頃、店へのゆくさ歸るさの道すがら金川さんのへい越しに冴ゆる三味の音色は耳にやわらかく泌みてくる。

敗戰後の苦惱から幾とせが過ぎて、やうやく人の心にも落ちつきを取戻し、昔ながらのこうした音色に心誘わろゝのはあながち私ばかりではないと思ふ。

風呂屋へのゆき歸り堀ばたを通るとき、阿部さんの障子越しに漏るゝ絲のしらべ、更けゆく夜の櫻町のしゞまに冴ゆる白根舘主人のひく長唄のしらべは、通りすがりの人の心をあたゝめる事でせう。

さわやかな初夏の綠したゝる中の口河畔の汀に立てば、滔らなる水の流れの大自然の美しさに、もろもろの喜びは切ないまでにあふれ、私は白根町に生れ得た倖せにむせぶ。

絶え間なき水の流れは我にもあらず幼き日の思い出が胸によみがへる。再びは永刧にその日はかへらない。物皆絶えず水の如く流れ、そして消えてゆく。青空に浮く一片の雲にも流れはあるもの、まして生き得るものの上には——

やがてこの紋の河畔に、六月の微風におくられて白根神社にか丶る曲馬のクラリオネットのメロデーと共に、いなせな若人達が凧上げに興ずる日も近い。そして又この川に釣糸をたれて樂しむ人も多い事でせう。

白根町は美しく健やかにより高い文化を求めて榮えてゆかうとしてゐる。

嬉しい朝もあろう、苦しい夜もあろう、人生は谷間の蔭のさゝ流れ、笑ひと希望の健やかな人間的な美しさに生きたいものである。

きびしい生活の波浪の中に、新しき時代は新しき文化と教養と共にありたいと私は希い祈る。

中の口川べりの青草は綠にもえ、水の色は日に増し青く、水に浮ぶ舟の姿も、眺めは一しほ水の青さ、空の蒼さ、水に惠れた白根の夏は青一色につきる。果しなく澄み切つた空を透して若人達の勇ましい凧音頭もこだまする。若人達の唇か漏るゝ歌声の愛町の調べそのものでなくて何でろう。そして又夜の宮月橋辺に涼む人影の上にも白い月光は水の如くぬれる樣に流れる事でせう。白根町の夏は中の口に訪れ、そして去つてゆく。

何ひとつのしげきもなけれど、幸福に明け暮るゝ白根町に生れ得た私の喜びと倖せは果しなくつきない。

白根町に夏は來ぬ。

友よ、私は白根町に夢も、憧れも、一切をさゝげ、万葉の青葉の如く、滔らけく、あきらけく生きたいとこひ希つてゐます。そして、育くまれゆく幼子らの上にも、倖せあれ、榮あれ、と祈り、白根町のとこしへの健やかさに努力したいと思つてゐます。

あゝ、夏はきぬ——

〔町民の聲〕

子供の遊び場を奪ふ勿れ

自動車やトラックによる子供達の生活の危險等を考へると、遊びのために安全な場所を準備することは、公共社會の重要な事柄と思ふ。青少年の犯罪の增加と思想の悪化は社會不安の中でも実に恐るべきものがあり、之を救ふ責任は云ふまでもなく家庭と社會にあるのであつて、單に學校教育だけでやりとげられるものではない。この青少年を犯罪から守り、健全に育てるための最善の方法はよきレクリエーションを與えることであり、その地域の子供達が自然に伸々と自由に遊べる機會を與へ、場所を與へることである。

私が今こゝで論じたいのは子供の遊びを輕視し、子供の遊び場を一方的に奪ふ——私にはそう思はれる——大人達に此の一文を寄せ、大きく社會の批判を得たいのである。

——それは某神社境內——他にもこのやうな例があるかも知れぬが——を昔の通り開放せよと叫ぶ、こう云ふと皆さんは誠に奇異の感をいだかれるだらう。「開放されてゐるじやないか」と、否実際は開放せられていないのだ。私共が幼い頃はスワノ木一ノ丁は勿論二、三ノ丁櫻町等の子供達まであの神社の境內を遊び場とし、或る時は競技大會や、野球大會や、リレーや走巾跳の砂場までこしらへて薄暗くなるまで遊んだものである。幼い頃の思ひ出には必ずあの神社の境內での、子供同志の町内對抗みたいな、リレーや野球大會が想起せられる。

あの頃現在の社務所の横あたりは土地が低くなり、家が二三軒あつたが皆良い人達ばかりで子供の遊びを理解して下さつた。併し現在はどうであらうか、こゝろみに日曜日に神社に行きたまへ、二組も、ひどいときには三組、四組も拜殿の前の石燈籠や樹のある狹い所や、右側の狹い場所で野球やら走り競爭やらをごた／＼とやつてゐるが、拜殿の左脇の廣々とした社務所の前は人の子一人ゐず、片隅に鷄が我がもの顔に遊んでゐるのが実情である。

いかなる理由にかその廣々とした社務所の前には子供に野球をやらせない、やらせないのは誰の意向なのか？今少し子供の遊びと云ふものに理解と同情がほしいと思ふ。

神社は決して一人のものではなく、公共的性格をもつてゐるものである。此れからの神社の經營維持は大衆と密接なる接觸をもち、親しまれる存在でなければならない。戰時中の如く國家で保護してゐた時代ではないのだ。あやまつてボールが社務所にとび込んで窓硝子を破損したこともあつたであらう。併しそれだからと云つて一方的に子供の遊び場を取り上げるのは子供の立場にたつときあまりに酷である。かされて云ふ、終戰後神社の在り方は變つて來てゐるのだ、子供の爲に、子供達をすく／＼と伸してゆきたい爲に公民館、P・T・A、司法保護委員、氏子總代等で此の問題を善處して頂き度い。

私の願い

一母より

◉私は最近この町へ越してきたものです。そして一番痛切に感じましたことは、娛樂設備の不足と言ふことです。子供から大人に至る迄のそれはパチンコ・紙芝居・映画だけのやうですが、しかしどれ一つとして親が子にすゝめられるものはありません紙芝居にしろギャングとチャンバラです。しかも日に三回も四回も入れ替り立ち替り來られますと、家計が保ちません。それが良心的な代物であるならいざしらず、くだらない英雄主義と、好奇心をそそるやうなものばかりでは……。

◉映畫にしろ、お涙頂戴の安易なセンチメンタリズムか、ヒワイで見てゐる方が赤面するやうな映画か、さもなくば紙芝居を誇張したやうな作品ばかりです。この爲、たまに子供に映画でも見せてやりたいと思ふ親心が、いつも滅入つてしまふのです。さりとて公民館の映画は面白くありませんし……。

◉先月の劔路の某映畫舘での四十一名の学童の生命を奪つた慘事を思ひ起すとき、慄然とさせられるのです。幸ひ當事者の綿密周到な注意によつて、まだ一度も事故を惹き起さないやうですが、轉ばぬ先の杖と申します。子供の爲なら石橋もたたいて渡りたい親の氣持。それなのに不完全な非常口と今にも落ちそうな二階を考へますと、大きな不安が胸中を去來します。

◉數年前迄は汚れたゴザが敷いてあつたきりだそうですが、椅子のお粗末さは直接觀客に苦痛を與へます。椅子の巾がせまく、渡してある細板と細板の大きな間隙は一時間以上も腰を下してゐたら尻の邊りがズキズキと痛みます。どうしてこんな處でゆつくり映画の鑑賞が出來ませう。それに加へて便所の非衛生的な惡臭が生温い風と共に場內に匂つてきます。尾籠な話ですが、あの汚い便所を使用するには相當の勇氣を必要とします。場內のジメジメした不潔な凸凹の土間、蚊の絶好の棲なのです。映畫が藝術である以上、美的情緒と和やかな雰囲氣を觀客にもたらすものである筈です。その情緒もお粗末な設備の爲に、そがれてしまひます。慰安である娛樂でさへも肉体的苦痛と不快な思ひをしなければ與へられないのでせうか？

◉貧弱な設備と封切よりも數箇月遅れて上映されてゐるにもかかわらず料金だけは一流舘並です。二年位前の二本立の概念は、この町ではニュース映画と劇映畫だつたそうですが現在は劇映畫二本と決つたやうです。しかも二本立の場合は料金が高くなります。こう云ふ種類の料金割増は他に比類をみないようです。何故なら二本立とはサービス的奉仕ですから……。又小人・中人・大人と三つに分けて料金をとるあたり、"とらんかな主義"が露骨にみえます。恐らく大人、小人の二分類はあつても、この三分類は全國に唯一つでせう。

◉隨分惡口を並べましたが、この不滿に同意の方々もきつと居られるでせう。公民館あたりでもつと面白く藝術的價値ある良心的映畫を上映していただけないでせうか。そして親子供に、樂しく鑑賞出來る映畫を！……。

◎原稿募集

1. 感想隨筆小説短文藝(郷土的な物)
   (イ)感想隨筆小説は千字内外
   (ロ)短歌俳句川柳 三首三句以内
   (ハ)時は二十行内外
2. 町民の声／五百字内外
3. 原稿は原稿用紙類別毎に別紙
4. 締切　六月三十日
5. 宛先　白根町役場公民館係